

第3回日本臨床検査学教育学会学術大会

大澤 進*

第3回日本臨床検査学教育学会学術大会は平成20年8月20日(水)~22日(金)の3日間、九州大学医学部百年講堂で開催致しました。この学会メインテーマは「知の実践と新世紀を拓く」です。サブテーマとしては4年制大学の増加や大学院課程の設置など教育環境の変化を鑑み「臨床検査技師の教育と研究の将来」を掲げて開催しました。今回の学会は同時に教員研修も開催いたしました。学会の一般演題は94題、そして参加者は205名でした。参加いただいた先生及び学生にお礼申し上げます。

臨床検査業務の高度化に伴い、日常検査を遂行するだけでなく、新しい臨床検査法や診断法の開発を担う人材、そして診療支援部長や検査部長などの管理職を担うための人材育成が必要とされる段階になりました。さらに臨床検査データの国際的な標準化も進み、臨床検査のグローバル化が進展しております。今後の臨床検査技師教育では国際的な活躍も期待される時代となり、海外との交流や留学などの推進もしなければなりません。

この学術大会では臨床検査技師の大学院教育と研究、そして海外との交流を主体に臨床検査技師教育について議論をしていただきました。

第1日目のシンポジウムでは「大学院教育の課題と将来展望」をテーマに、大学院教育に携わる教員、卒業した学生を受け入れる大学病院検査部、臨床検査試薬企業の研究所、そして検査センター関連団体から、それぞれ求める学生像や教育への要望を述べていただきました。また、今回は九州

で開催することもあり、特別講演ではアジアとの国際交流からタイ国のマヒドン大学保健学科准教授の Kulnaree Sirisali 先生をお迎えし、「The Thai Medical Technology Education: An Unique Growing Pathway」と題して講演を頂きました。マヒドン大学の保健学科では修士課程に国際コースを設定し、英語による授業を行っており、我が国の臨床検査技師教育での国際的な外国語教育の重要性を再認識した講演になりました。

教育講演は2つ企画しました。遺伝子検査は臨床検査分野で大きな変革をもたらしました。しかし、病原菌、ウイルスの検出や白血病などの癌遺伝子の検査に限定されております。最近発見された micro-RNA は癌を初め多くの疾患の発現を促進、または抑制することが明らかになり、生化学検査のように繰り返し行われる新しい遺伝子検査になることが予想されます。九州大学大学院の梅村先生に「micro-RNA 検査の現状と将来展望」について講演をお願いしました。また、もう一つの教育講演は病原体取扱いに際してのバイオセーフティーとその国際的な潮流について、国立感染症研究所の重松美加先生と安藤秀二先生に講演をしていただきました。実習などで用いる病原体の取り扱いの良い指針となりました。

第2回学術大会と同様にイブニングセミナーとしてワンポイントアドバイスコナーを開催し、約120名の教員が各教科の実習を中心に教員同士の意見交換、教員間の情報提供や教育方法の議論が熱心に行われました。

*九州大学大学院医学研究院保健学部門 検査技術科学分野生体情報検査領域臨床化学研究室 osawas@shs.kyushu-u.ac.jp

市民への公開講座として「生活習慣病と臨床検査の見方」を開催し、「健診と生活習慣病：特定健診制度に基づいた生活習慣病の臨床検査とその意義」は福岡市健康づくりセンターの小池城司先生、「高血圧、高脂血症と臨床検査：動脈硬化の予防を目指して」は九州大学医学研究院看護学分野の樗木晶子先生、そして「糖尿病と臨床検査：血糖コントロールと合併症の評価、その対策」は福岡大学医学部糖尿病内科・臨床検査医学の安西慶三先生がそれぞれ講演され、市民への情報提供が行われました。

一般演題は 94 題であり、学生や大学院生の発表も多く、教員と学生による活発な議論が行われました。今回から学会期間中に新たに教員研修を

併催することになり、「各種認定技師制度の現状と今後」を日本臨床検査同学院理事長の伊藤機一教授に、「輸血療法の実施に関する指針及び血液製剤の使用指針最近の話題」を東京大学医学部附属病院輸血部の高橋孝喜教授にそれぞれ講演していただき、日常での学生教育に還元する内容となりました。

最後になりますが、この学会に後援をいただきました文部科学省、厚生労働省の両省ならびに学会の実行委員、そして九州大学医学研究院保健学部門の教員に厚く御礼申し上げます。また、開催にあたっては医歯薬出版株式会社をはじめ臨床検査試薬企業の関係諸団体に協賛を賜り、重ねて厚く御礼申し上げます。